『喩世明言』四十卷本考

廣澤裕介

明末の短篇白話小説集「三言」の第一集『喩世明言』には、書誌上の未解決の問題があった。現存の版本は、衍慶堂刊行の二十四卷本（内閣文庫所藏）と馬廉氏舊藏の殘本（北京大學圖書館所藏）の二種のみで、完本であるべき四十卷本の存在は、『古今小説』四十卷本（内閣文庫所藏、天許齋刊本）と混同されてきた。しかし、筆者はその認識が書誌的な狀況から見て不適切であることを指摘した。[1] 本稿では『喩世明言』四十卷本が實際に刊行されていたことを證し、その篇目順序（目次）が部分的に復元可能であることを論じる。

その根據となるものはすべて二十四卷本から得られるので、まずはその版本形態から確認してゆく。

一　衍慶堂刊『喩世明言』二十四卷本の形態

①封面の問題

封面の形狀は、上部に「重刻增補古今小説」と横書し、その下の右半分に「喩世明言」と大書、左半分には刊行者衍慶堂の識語がある。

まず、その「重刻增補古今小説」という表記に問題がある。『古今小説』の現存版本二種はいずれも四十卷本であり、[2]「增補」としたのでは二十四卷本の形態にそぐわない。むろん、この種の虚僞は、明末の通俗小説出版では疑問視するに値しないが、封面の問題はこれだけではない。

書名の左側にある衍慶堂の識語は「綠天館初刻古今小説□十種」（□は空白。以下同じ）という一文で始まる。『古今小説』は四十卷であるから、その空白には「四」の文字が入るのだろう。[3] この部分は、周圍に汚れもなく、きれいに空白になっていることから、版木の損壞等による偶然ではなく、意圖的に削りとられたものと思われる。その意圖とは、收錄數に合わないためであろう。

問題はこれが意圖的なものであることである。封面は表紙の裏にあり、識語は讀者が最初に讀む文章である。出版説明や自己宣傳をするための識語が、書かれた當初から文字が拔けた文章になっていたとは到底思われない。「重刻增補古今小説」の表記と考え合わせても、そこに文字「四」が入っていた時期、すなわち篇目の收錄數がそれに合うような時期があったことを想定せずには、この問題を解明することはできまい。この識語（あるいはこの封面の版木）は四十卷本が印行されるときに書かれ（作られ）たもので、元來は二十四卷本のためのものではないと思われる。

この封面の問題が、二十四卷本以前に『喩世明言』四十卷本が同じ版木で刊行されていたと考える根據の一つである。

②『喩世明言』二十四卷本の版木の問題

篇目の本文は『古今小說』と重複するものが二十一篇、『警世通言』とは一篇、『醒世恒言』とは二篇である。繪圖では、それぞれ二十種、二種、二種である。以下、使用された版木の由來を確認してゆく。

『古今小說』と重複する篇目は、天許齋本『古今小說』の版木と同板である。[4] その版木が天許齋から衍慶堂へ移ったことを示すのは、卷四「蔣興哥重會珍珠衫」の第十二葉版心である。版心は、上から「喩世明言」と書名、中段に「卷四」という卷數表示があり、そのすぐ下に「珠衫」という文字が確認できる。これは天許齋本の卷一の版心にある、篇目の略稱表示「珍珠衫」の「珠衫」の文字に一致する。この文字が殘った偶然は、この卷四版心の『古今小說』からの改刻（書名、卷數）がおそらく一度きりであったをことを示すものであろう。[5]

『警世通言』と重複する卷二十三「假神僊大鬧華光廟」の版木は、兼善堂本『警世通言』（蓬左文庫所藏）とは異板の可能性が指摘されている。

匡郭の損壞狀況を見れば同板後印のようであるが、兼善堂本では墨丁になっている第七葉b七行の一字目、第八葉a一行の十四字目に「說」「魏」の文字が入り、第十二葉二行の「三丁之長」は「三寸之長」となる。長澤規矩也氏はその點から「同版なりとはいひがたし。」とし、また、「此卷の口繪は異版とは考へられざる程相似す。」とし、判斷に窮している。[6]

實見するに、その匡郭は兼善堂本の損壞に加え、さらに新しい損壞

表1

卷	目次	三言重複	本文と繪圖の對應
1	張廷秀逃生救父	恒言20異板	○恒言20異板
2	陳御史巧勘金釵鈿	古今2	○
3	滕大尹鬼斷家私	古今10	○
4	蔣興哥重會珍珠衫	古今1	○
5	白玉娘忍苦成夫	恒言19異板	○恒言19異板
6	新橋市韓五賣春情	古今3	○
7	閒雲菴阮三償寃債	古今4	○
8	沈小官一鳥害七命	古今26	×古今24
9	陳希夷四辭朝命	古今14	×古今6
10	趙伯昇茶肆遇仁宗	古今11	○
11	窮馬周遭際賣鎚媼	古今5	○
12	宋四公大鬧禁魂張	古今36	×古今7
13	裴晉公義還原配	古今9	○
14	楊謙之客舫遇俠僧	古今19	×古今29
15	鬧陰司司馬貌斷獄	古今31	○
16	任孝子烈性爲神	古今38	×古今30
17	遊酆都胡母廸吟詩	古今32	○
18	李公子救蛇獲稱心	古今34	×古今33
19	汪信之一死救全家	古今39	×古今12
20	史弘肇龍虎君臣會	古今15	×古今13
21	吳保安棄家贖友	古今8	○
22	陳從善梅嶺失渾家	古今20	○
23	假神僊大鬧華光廟	通信27	○
24	楊八老越國奇逢	古今18	×通信28

が確認できる。これが同板でないなら覆刻板ということになるが、通俗小説の覆刻が原刻の損壊まで忠實に再現して、版面をあえて汚すとは考えにくい。明代において、文人趣味的な出版では宋元の古本を重んじ、原本そっくりの覆宋、覆元本を作る例を數多く見るが、通俗出版では多く書名に「新刻」「新鐫」等の文字を冠し、むしろ新刊であることを重んじる傾向がある。

衍慶堂は二刻增補『警世通言』も刊行し、筆者が實見したその創本二十四卷本（後述する『警世通言』二十四卷本）は兼善堂本と同板である。後述するが、兼善堂本の版木の補修は、その『警世通言』二十四卷本にも確認でき、この卷二十三の補修は『警世通言』二十四卷本の補修と同種のものである。この篇目の文字異同は埋め木で補刻したもので、兼善堂本の同板後修であると考えられる。

繪圖は、卷二十三に兼善堂本卷二十七の「假神僊大鬧華光廟」が收錄される。卷二十四は本文と繪圖が對應せず、『古今小說』卷十八の繪圖が入るべきところに、兼善堂本卷二十八のものを收める。いずれも兼善堂本と同板である。

『醒世恒言』と重複する篇目は卷一、卷五である。しかし、版木は葉敬池本『醒世恒言』（內閣文庫所藏）と同板ではない。繪圖は葉敬池本のものより簡略化され、葉敬池本に後れる異板と考えられる。以下、本文の版木の說明をする。

卷一「張廷秀逃生救父」は『醒世恒言』卷二十（卷頭表示は「第三十卷」となる）と重複するが、同板ではない。しかし、覆刻した可能性が考えられる。第五十四葉a六行の「畧露其意」、第七十葉a二行の「相抱而哭」、同葉b十行の「廣請賓朋」など各四文字は三文字分のスペースに、第七十葉a十行の「錢銀子而去」は四文字分のスペースに刻字されている。これらは葉敬池本と同じである。

また、葉敬池本との相違點もある。葉敬池本の版心にある葉數表示は第五十三葉以降、五十三、五十四、五十七、五十八…と竝んでいる。しかし、五十五、五十六番目の葉を缺くのではなく、それぞれに「五十七」「五十八」の番號を誤ってふっただけなのでストーリー上の問題はない。つまり、葉敬池本が「五十五」「五十六」という表示を拔いて最後の「七十四」葉まで數えるのに對し、この卷一は正確に數えて「七十二」で終わる。このように葉敬池本卷二十よりも適當な一面もあり、このテキストが葉敬池本に先んずる可能性も出てくる。

しかし、筆者はこのテキストがやはり葉敬池本に後れ、葉敬池本を襲ったものであると判斷する。判斷の根據は卷末の卷數表示である。卷一の表示は「喩世明言卷一□終」と刻字され、「喩」「明」は他の文字と字體が異なり、「喩」「明」以外の文字は葉敬池本の表示「醒世恒言卷二十終」の該當する文字に字體が似ている。さらに注意深く見ると、「喩世明言卷一□終」の「一」は、「醒世恒言卷二十終」の「二」の文字の下の長い横線とはほぼ同じ位置に刻字されている。『喩世明言』卷一の卷末卷數表示は葉敬池本『醒世恒言』卷二十のものをもとにしなければ起こりえないものと思われる。[7]

卷五「白玉娘忍苦成夫」は、『醒世恒言』卷十九と重複するが、葉敬池本と同板ではない。テキストに付く傍點の位置にずれが見られ、行末から始まる文章には缺落が多い。また、第十二葉以降にある「礼」字が葉敬池本では「禮」で、「頑」（「顧」）、「观」（「觀」）なども字體の相違が見られる。また、第九葉b十行の「問」は葉敬池本では「閃」、第十葉a四行の「敎」は「數」、第十葉b四行「一」は「已」などの異同がある。

以上のことから分かるように、衍慶堂はこの二十四卷本刊行に際し、葉敬池の『醒世恒言』の版木を一枚も入手していない。衍慶堂はのちに葉敬池本とは別個の形態を持つ『醒世恒言』を刊行するが、結局、葉敬池本と同板によるものを衍慶堂の出版物の中に見ることはない（後掲資料2參照）。

③不自然な卷數表示、および本文と繪圖の對應の問題

各篇の本文は卷頭に題する篇名の前に卷數表示がある。確認すると卷十以降を中心に、不自然な表示がいくつかある（表2）。

卷十二、卷十四、卷十六、卷十八、卷十九の表示は、正常と思われる卷十一、卷十三、卷十五などの表示とは異なっている。また、これらは長澤氏が指摘した本文と繪圖が對應しない篇目におおむね重なっていることにも注目したい。[8]

これら卷十以降の表示は、正常なものを含め、大別すると三つのパターンがある（卷十四の「第□十四卷」の「第□」の二文字は摩滅し、判讀が困難なため除外）。だが、卷數が一つの出版物の中でわざわざ三種類で表示されるはずはなく、むしろ三種類あるほうが不自然である。

卷十二、卷十九の卷頭表示は「第一十二卷」「第一十九卷」となる。しかし、十の位の「一」の字形は、本來「二」「三」という文字であったものを削りとって「一」に見せたようである。また、卷二十の「二」の文字も、字形のバランスから判斷すると、本來は「三」であったと思われる。

そして、卷十六、卷十八では、「第」と「十」の文字の間に一字分の空白がある。しかし、卷十五のような表示もあり、わざわざ一字分のスペースを空ける必要はあるまい。前述した封面識語の空白同樣、そこには本來なんらかの文字が入っていたと考えられる。

以上のことから考えて、卷數表示は最初から三種類だったのではな

表2

卷	卷頭卷數表示	版心	卷末卷數表示	本文繪圖の對應
1	第一卷	卷一	喩世明言卷一□終	○
2	第二卷	卷二	第二卷	○
3	第三卷	卷三	（摩滅）	○
4	第四卷	卷四	第四卷	○
5	第五卷	卷五	第五卷	○
6	第六卷	卷六	第六卷	○
7	第七卷	卷七	第七卷	○
8	第八卷	卷八	（なし）	×
9	第九卷	卷九	（なし）	×
10	第十卷	卷十	第十卷	○
11	第十一卷	卷十一	第十一卷	○
12	第一十二卷	卷一十二	一十二卷終	×
13	第十三卷	卷十三	第十三卷	○
14	第□十四卷	卷□十四	第□十四卷終	×
15	第十五卷	卷十五	第十五卷終	○
16	第□十六卷	卷□十六	第□十六卷終	×
17	第十七卷	卷十七	第十七卷終	○
18	第□十八卷	卷□十八	第□十八卷終	×
19	第一十九卷	卷一十九	第一十九卷終	×
20	第二十卷	卷二十	第二十卷終	×
21	第二十一卷	卷二十一	第二十一卷終	○
22	第二十二卷	卷二十二	第二十二卷	○
23	第二十三卷	卷二十三	第二十三卷	○
24	第二十四卷	卷二十四	第二十四卷終	×

く、版木に前歴があることを示していると思われる。

さて、巻十八の表示について考えてみると、その版木は過去に巻二十八か巻三十八で印行されていなければ、このような表示にはなりえない。しかし、それが巻二十八や巻三十八であったならば、巻數は二十四を越えるのだから、當然二十四巻本では收錄できない。この篇目は『古今小說』で巻三十四に收錄される以上、その表示は「第□十八巻」の原形になりえない。また、これを巻二十八、巻三十八で收錄する小說集も見られない。そう考えると、天許齋本『古今小說』と『喩世明言』二十四巻本との間になんらかの出版物があったと考えられ、少なくとも巻二十八を收錄するものを想定する必要がある。版心に「喩世明言」とあるように、考えられるのは『喩世明言』四十巻本の存在である。巻數表示の問題は、四十巻本が存在したと假定すれば一擧に解決されよう。これが四十巻本は存在したと考えるもう一つの根據である。

これら不自然な巻數表示のある篇目が、繪圖と本文とが對應しない九篇とおおむね重なることから考えると、繪圖が對應していない殘る巻八、巻九の表示は、元來の巻數から一、二畫削りとるだけの作業では適當な數字にならなかったために、完全な彫り變えをしたと考えるのは憶測が過ぎるだろうか。二十四巻中この二篇だけ巻末表示がないのも、その過程で生じた不備かもしれない。[9]

不自然な巻數表示については以上のように說明されると思われるが、それらが繪圖と本文とが對應しない九篇と重なることは、なお興味深い問題である。繪圖の對應に關し、刊行者衍慶堂は注意を怠ったといえるのだが、これとまったく同じ問題をもつ版本が、衍慶堂の他の出版物の中にある。それがこれまであまり注目されることがなかった『警世通言』二十四巻本（天理圖書館所藏）で、その版本形態が、實は『喩世明言』四十巻本の復元の鍵となる。

二　衍慶堂刊『警世通言』二十四巻本の形態

衍慶堂が刊行した『警世通言』は、四十巻を收錄する版本が大連圖書館に收藏され、[10]封面の形狀から二刻增補『警世通言』と呼ばれる。その創本とされる二十四巻本は、四十巻本封面にあった「二刻增補」の文字がなくなっていることから『警世通言』二十四巻本と呼ばれる。[11]この二十四巻本は過去に修復がなされ、版本系統に關する判斷は難しいが、從來の指摘どおり兼善堂本『警世通言』の同板後印と見られる。[12]四十巻本は二十四巻本に先行するものとされているが、筆者未見のため、長澤氏、孫楷第氏が紹介された資料に基づいて考える。[13]

この二十四巻本の存在によって、衍慶堂が二十四巻本の出版をシリーズとして企畫していたことがわかる。以下、二つの二十四巻本を比較し、「三言」三書をすべて刊行した唯一の書坊衍慶堂の出版活動を考察する。

①『警世通言』二十四巻本の版木の問題

二刻增補『警世通言』は兼善堂本の同板後印と認められている。[14]

前述の『喩世明言』二十四巻本の巻二十三には、兼善堂本と文字の異同があり、異板である可能性が指摘されていた。兼善堂本巻十九に見られた墨丁が『喩世明言』では適切な文字になり、また文字の異同があった。だが、墨丁の補修や文字の異同は兼善堂本と『警世通言』二十四巻本の間にも見出すことができる。

表3

兼善堂本『警世通言』				衍慶堂『警世通言』二十四卷本			
巻	葉	行		巻	葉	行	
40	39			20	9		
49	19	9	8	49	19	9	8
b6	a5	a4	b8	b6	a5	a4	b8
雌雄■	督■曆	定■死	學■往	雌雄□	督南廂	定至死	學師往

このように、『警世通言』の版木に補修の手が入っているという點では二つの二十四卷本は共通しており、『警世通言』二十四卷本が兼善堂本と同板であるすれば、『喩世明言』二十四卷本卷二十三も兼善堂本と同板であると認められよう。二つの二十四卷本にまたがる兼善堂本の版木に同じ修復がなされているのを見ると、その補修作業および印行は同時期であると考えてよいだろう。

また、『警世通言』二十四卷本の卷十九「范巨卿雞黍死生交」は天許齋本『古今小說』卷十六と同板である。

②『警世通言』二十四卷本の形態

『警世通言』二十四卷本の形態は、『喩世明言』二十四卷本に酷似している。『喩世明言』二十四卷本に見られる本文と繪圖の不對應、および不自然な卷數表示の二つの問題が、この『警世通言』二十四卷本にも共通して見られるからである。[15]

注目すべき事實が二十四卷本の繪圖の對應（表4の三段目）と四十卷本の篇目配列（同じく四段目）との比較から導きだされる。

本文に對應していない卷八、卷二十、卷二十三の繪圖は、先行本である四十卷本の卷八、卷二十、卷二十三の篇目に一致していることが

表4

巻	二十四卷本篇目本文	二十四卷本繪圖の對應	四十卷本の篇目配列
1	兪伯牙摔琴謝知音	○	兪伯牙摔琴謝知音
2	莊子休鼓盆成大道	○	莊子休鼓盆成大道
3	王安石三難蘇學士	○	王安石三難蘇學士
4	拗相公飲恨半山堂	○	拗相公飲恨半山堂
5	呂大郎還金完骨肉	○	呂大郎還金完骨肉
6	兪中舉題詩遇上皇	○	兪中舉題詩遇上皇
7	蘇知縣羅衫再合	○	蘇知縣羅衫再合
8	王嬌鸞百年長恨	×范鰍兒雙鏡重圓	范鰍兒雙鏡重圓
9	三現身包龍圖斷寃	○	三現身包龍圖斷寃
10	一窟鬼癩道人除怪	○	一窟鬼癩道人除怪
11	金令史美婢酬秀童	○	金令史美婢酬秀童
12	張主管志誠脫奇禍	○	張主管志誠脫奇禍
13	鈍秀才一朝交泰	○	鈍秀才一朝交泰
14	老門生三世報恩	○	老門生三世報恩
15	崔衙內白鶴招妖	○	崔衙內白鶴招妖
16	計押番金鰻產禍	○	計押番金鰻產禍
17	趙太祖千里送京娘	○	趙太祖千里送京娘
18	宋小官團圓破瓊笠	○	宋小官團圓破瓊笠
19	范巨卿雞黍死生交	○	范巨卿雞黍死生交
20	旌陽宮鐵樹鎮妖	×單府郎全州佳偶	單府郎全州佳偶
21	桂員外途窮懺悔	○	桂員外途窮懺悔
22	唐解元出奇玩世	○	唐解元出奇玩世
23	李謫仙醉草嚇蠻書	×萬秀娘仇報山亭兒	萬秀娘仇報山亭兒
24	蔣淑眞刎頸鴛鴦會	○	蔣淑眞刎頸鴛鴦會
25			趙春兒重旺曹家莊
26			杜十娘怒沈百寶箱
27			喬彥傑一妾破家

28		王嬌鸞百年長恨
29		晏平仲二桃殺三士
30		李秀卿義結黃貞女
31		陳可常端陽僊化
32		崔待詔生死冤家
33		李謫仙醉草嚇蠻書
34		錢舍人題詩燕子樓
35		宿香亭張浩遇鶯鶯
36		金明池吳清逢愛愛
37		趙知縣火燒皂角林
38		況太守斷死孩兒
39		福祿壽三星度世
40		旌陽宮鐵樹鎮妖

確認できる。そして、それを含めた二十四卷本の繪圖配列全體は、四十卷本の卷二十四までの篇目順序と全く同じになっていることが確認されよう。果たして、これが偶然に起こりうるものであろうか。つまり、二十四卷本の繪圖の配列は四十卷本の篇目順序をそっくり保存しており、むしろ四十卷本のままの狀態といってもよい。これは衍慶堂が二十四卷本を作る作業工程を充分に想像させる。

衍慶堂は篇目の本文は二十四卷本用の目次どおりに編集したが、それに對應する繪圖の入れ替えを忘れ、安易にも、四十卷本の卷二十五以降をカットしただけの作業で印行したのである。その結果、二十四卷本は本文と繪圖が對應しないものを含んだ狀態で刊行されたのである。

さらに、問題はもう一つあった。『喩世明言』の繪圖が對應しない篇目では不自然な卷數表示が見られたが、『警世通言』二十四卷本には明確といえるほどのものはない。しかし、この卷二十、卷二十三は、四十卷本では卷四十、卷三十三に收錄されており、實際に「四十」から「二十」へ、「三十三」から「二十三」へ彫り變えられたと思われる形跡が確認できる[16]（後掲資料1）。ここでの彫りかえは『喩世明言』ほど安易なものではないが、卷八の卷末表示は「□□□八卷終」となっており、四十卷本で卷二十八に收錄されていたことを考慮すれば、その原形は「第二十八卷終」だったのだろう。

以上のように、本文と繪圖が對應しない篇目と不自然な卷數表示が見られる篇目が一致するのは、單なる偶然ではないことが分かる。それらの原因は、二十四卷本以前に四十卷本が刊行されていて、その四十卷本から二十四卷本を作り出す際の安易で粗略な作業によるものである。二十四卷本に見られる二つの形態問題は、四十卷本が存在していなければ起こりえなかったものであろう。

これは『警世通言』二十四卷本と共通の形態問題をもつ『喩世明言』二十四卷本にもあてはまると思われる。これを『喩世明言』にあてはめ、現存の二十四卷本から傳存しない四十卷本の篇目配列を復元してみよう。

三　『喩世明言』四十卷本の復元

衍慶堂が刊行した二つの二十四卷本で使われている版木の性格は一致し、二つの版本の形態も一致している[17]。それを前提に、衍慶堂刊『警世通言』の完本（四十卷本）と削本（二十四卷本）の關係を『喩世明言』にあてはめ、佚書となったその完本・四十卷本の篇目順序を復元する。いうまでもないが、これはあくまでも一試論である。

表5

巻數	二十四巻本繪圖	復元四十巻本篇目	二十四巻本での收錄
1	恒言20異板	？	
2	古今2	陳御史巧勘金釵鈿	巻2
3	古今10	滕大尹鬼斷家私	巻3
4	古今1	蔣興哥重會珍珠衫	巻4
5	恒言19異板	？	
6	古今3	新橋市韓五賣春情	巻6
7	古今4	閒雲菴阮三償寃債	巻7
8	古今24	楊思溫燕山逢故人	巻8
9	古今6	葛令公生遺弄珠兒	巻9
10	古今11	趙伯昇茶肆遇仁宗	巻10
11	古今5	窮馬周遭際賣餬媼	巻11
12	古今7	羊角哀捨命全交	なし
13	古今9	裴晉公義還原配	巻13
14	古今29	月明和尚度柳翠	なし
15	古今31	閙陰司司馬貌斷獄	巻15
16	古今30	明悟禪師趕五戒	なし
17	古今32	遊酆都胡母廸吟詩	巻17
18	古今33	張古老種瓜娶文女	なし
19	古今12	衆名姬春風吊柳七	なし
20	古今13	張道陵七試趙昇	なし
21	古今8	吳保安棄家贖友	巻21
22	古今20	陳從善梅嶺失渾家	巻22
23	通言27	假神僞大鬧華光廟	巻23
24	通言28	白娘子永鎭雷峰塔	なし
：			
30		史弘肇龍虎君臣會	巻20
：			
32		宋四公大鬧禁魂張	巻12
34		？	
：			

巻二十四までは二十四巻本の繪圖の配列から、[18]巻三十、巻三十二は巻數表示の狀態から復元が可能になる。また、不自然な巻數表示からつぎの篇目の收錄が考えられる。

表6

篇目	四十巻本での收錄	二十四巻本での收錄
任孝子烈性爲神	巻26 or 巻36	巻16
李公子救蛇獲稱心	巻28 or 巻38	巻18
汪信之一死救全家	巻29 or 巻39	巻19

この復元案について、依然として殘る問題を記しておく。それは巻一、巻五の收錄篇目である。二十四巻本では『醒世恒言』と重複する篇目が收められているが、それが四十巻本に入っていたとすると、「三言」百二十篇の中に重複があったことになる。この點に關しては後考を俟ちたい。[19]

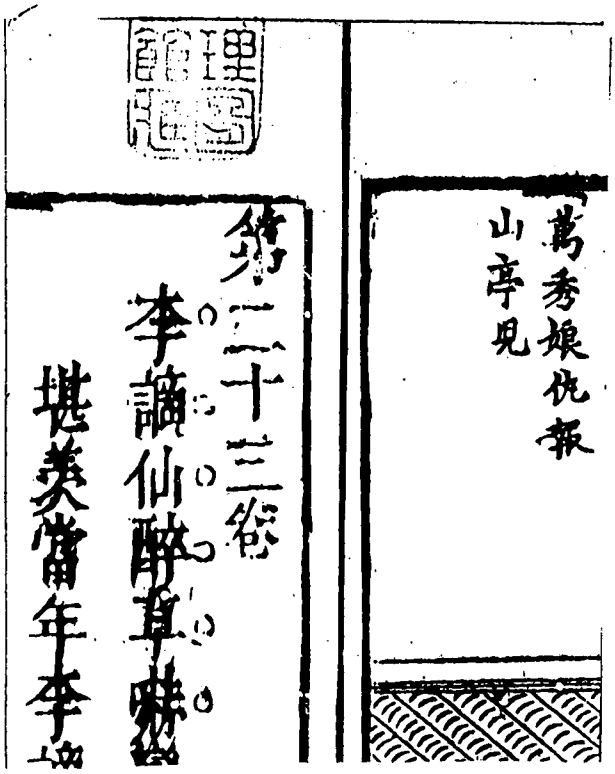
むすび

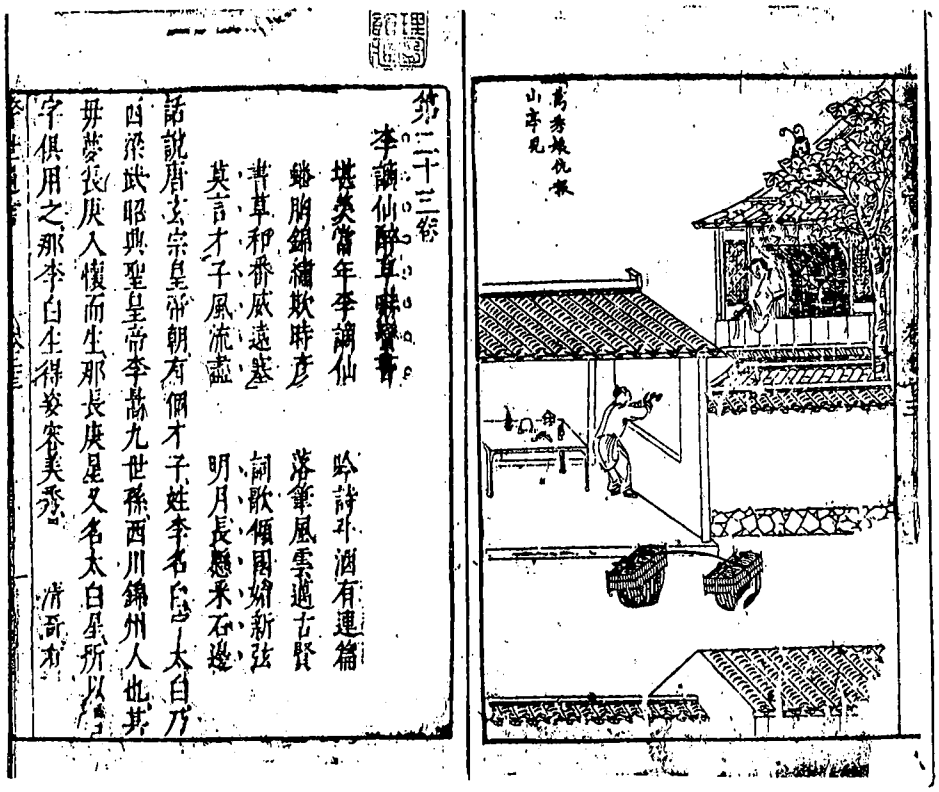
明代中期ごろに確立された明朝體という技術革新が及ぼした影響の範圍は、出版業という産業の一分野にとどまるものではない。特に明末は複雜で多樣な文化を生み出した時代とされるが、それらの大部分

資料　1

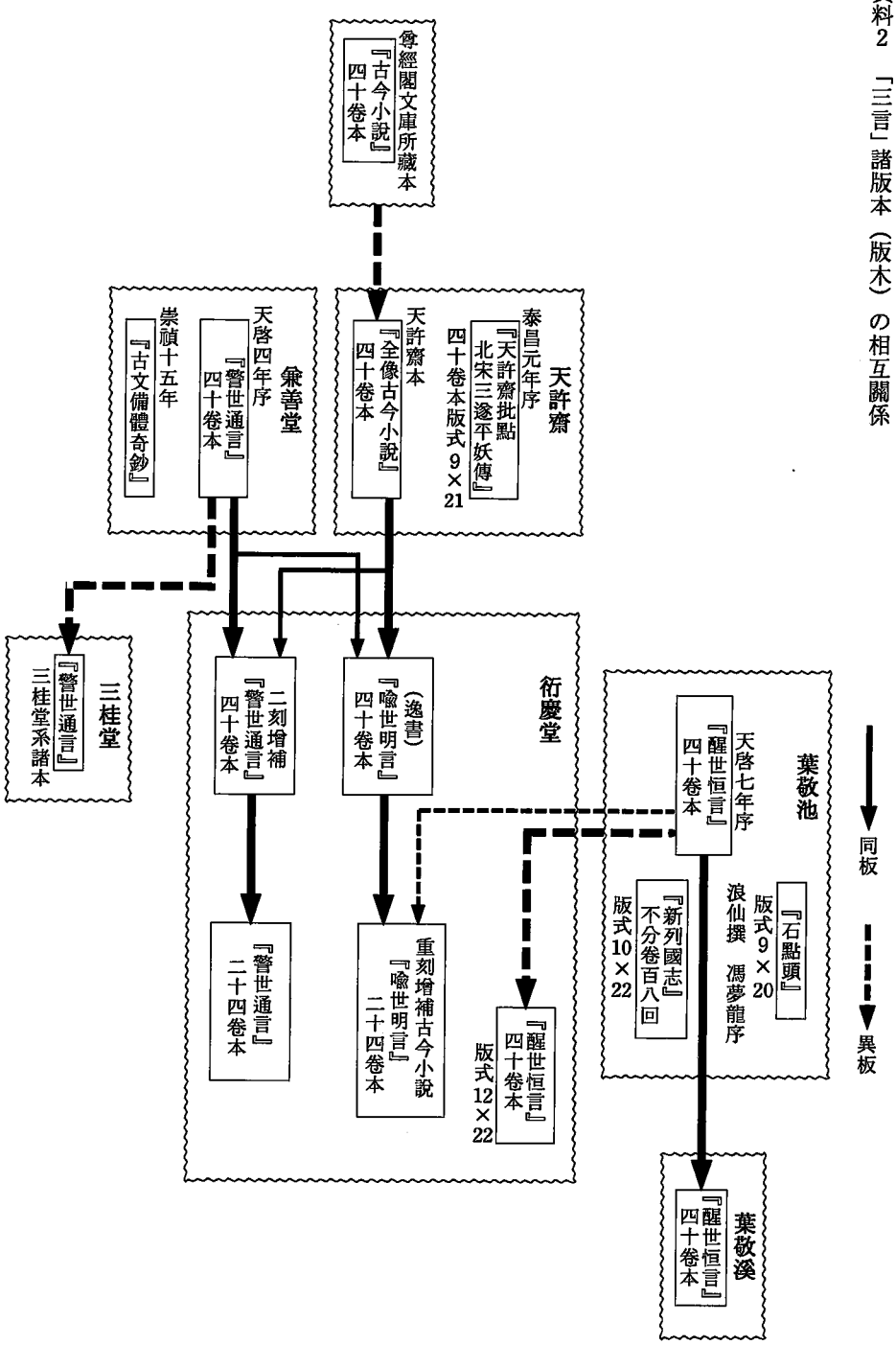
『警世通信』二十四卷本（天理圖書館所藏）は繪圖と本文が各篇目（卷）ごとに綴じられており、繪圖b面と本文第一葉a面が見開きになる。卷二十三收錄の繪圖「萬秀娘」は、本文「李謫仙」に對應していない。

また、卷頭の卷數表示「第二十三卷」の「二」の文字は、「三」を彫りかえたものと思われる。





資料2　「三言」諸版本（版木）の相互關係



が出版物という媒體を介して流通していたのならば、その流行や衰退にも出版業は影響力を持っていたと思われる。

明朝體成立の直接的影響である出版刊行物の量の増大とジャンルの擴大は、出版業が一種のメディア産業として急成長していた證といえる。[20] 通俗小説はその擴大したジャンルの一つで、明朝一代で價値の變動が最も激しかった事物の一つである。それを出版業界の動向をふまえてみるならば、その背後には出版業界の變化が誘導した知識や情報をとりまく環境の變化、そしてそれにともなう受容者側の知性のありかたに變化があったのではないだろうか。明代の末期、特に李卓吾以降には通俗小説にも出版競爭があった様子があり、「三言」はそのような時代に刊行された。現存の「三言」各版本の成立狀況を確認してゆくと、資料2のような複雜な關係圖が出來上がる。

「三言」は馮夢龍が編纂した三つの小説集とされるが、現存版本は複雜に交錯しながら成立している。資料2は筆者が確認しうる範圍で、現存しない版本も含めると「三言」の出版狀況はより複雜なものになるだろう。個々の版本の性格を把握し、それぞれの關係性を考慮した上で、「三言」成立の全體像を捉えようとすれば、これまで定説とされてきた認識にも再檢討を要するものが多いと思われる。例えば、三つの小説集が當初から一連のシリーズであったという、いわば研究の前提になっていた認識までもがその對象になってくるだろう。

長澤氏は「「三言」書名板本續考」という一文でそれまでの「三言」の版本研究を總括し、またその課題を示された。本論が取りあげた封面の問題や本文と繪圖の不對應の問題は、すでに氏によって指摘されたものである。確かに版本研究には新資料の發見を待つしかない停滯期もあるが、その停滯期が長すぎたために、「三言」版本に多種多様の問題が存在していたことは閑却されてしまったのかもしれない。

各版本に存在した種々の問題は個別に見れば非常に不可解であるが、それを集約して考えれば、問題の發生原因となった一つの版本が導き出されるのではないだろうか。そして、『喩世明言』の四十卷本が實在したとすれば、『古今小説』との混同は誤った見方であると確認されよう。『古今小説』は「三言」の前段階に存在した小説集で、『喩世明言』とはそもそもの存在意義が異なると考えられる。

以上、『喩世明言』の四十卷本が存在していたことを述べたが、書誌や版本の問題點は『警世通言』や『醒世恒言』にも見られ、『喩世明言』四十卷本が存在したことの意味や「三言」成立の全體像を捉え直すのは、それらを解明しつつ愼重になすべきと考える。また、本稿は『喩世明言』の四十卷本の實在を證明することを第一の目的としたため、版本を扱う際に記すべき各版本の書誌的なデータは、論が煩雜になることを避けて割愛せざるをえなかった。『喩世明言』二十四卷本の問題點もここで取りあげたものがすべてではなく、[21] 十分な解明にいたらない煩瑣な問題も多い。それらについてはいずれ別稿で論じたい。

注

(1) 拙稿「尊經閣文庫收藏『古今小説』の成立」(『中國古典小説研究』第四號、中國古典小説研究會、一九九八、十二)、「『古今小説』二種の文字異同一覽及びその先後問題(稿)」(同誌第五號、一九九九、十二)參照。

(2) 現存の『古今小説』の版本には内閣文庫所藏の天許齋刊本と尊經閣文庫所藏本があり、いずれも四十卷本である。從來、その成立は前者が先行し、後者がその覆刻本とされてきたが、筆者は繪圖と本文テキ

ストの比較から、後者が前者に先行するものと判斷した。前掲拙稿を參照されたい。

(3) 鹽谷溫氏「明の小說『三言』に就いて（二）」（『斯文』第八編第八號、斯文會、大正十五年九月）參照。また、長澤規矩也氏「「三言」「二拍」について（一）」（『斯文』第十編第九號、昭和三年九月）には「喩世明言と稱する書が內閣文庫所藏の二十四卷六本以前に存せしや否やを定るは頗る難事に屬す。其見返の文をそのまゝ信ずれば、以前の存在は否認せざるべからず、而も其文には脫字などあり、重刻增補古今小說と冠して卷數卻つて減ず。」とある。

(4) 長澤氏前掲論文に「二十四篇中、本文の古今小說と一致するもの二十一、此は明に前記內閣文庫所藏の古今小說の各之に相當する篇の同板後印に屬す」とある。

(5) 版木の讓渡は、天許齋から衍慶堂へ直接であった可能性が考えられる。衍慶堂の版木の取得については、兼善堂刊『警世通言』の成立にも關わるため、ここで十分に論ずることは出來ない。いずれ別稿をもって論じたい。

(6) 長澤氏前掲論文參照。また「「三言」書名板本續考」（『書誌學』第十三卷三號、日本書誌學會、昭和十四年九月）には「予其後謂へらく、內閣文庫所藏の二十四卷本明言中、…通言に出づる一篇も、兼善堂本と同板たるに疑あれば…」とある。

(7) この版木は葉敬池本の覆刻であると思われるが、その卷末表示は版木に前歷があった可能性を示す。その版木は、そもそも葉敬池本を覆刻した『醒世恒言』を作るために彫られ、『喩世明言』二十四卷本で再利用されたものなのか、あるいは『喩世明言』の卷一として彫られ、卷數表示が原本のままで誤って彫られ、訂正されたものなのか、可能性は二つある。『醒世恒言』のテキスト問題にも關わる問題であり、ここで判斷することは難しい。

(8) 「然るに此衍慶堂本喩世明言は本文が古今小說等の舊板の配合によりて成れるのみならず、口繪を詳細に檢するときは是亦舊板を用ゐしのみならず、時に本文と符合せざるものあるを知るべく、下表示す所は其例にして、二十四篇中九篇の口繪は、其版心の卷數は順序を逐へど、實は本文に適はざるなり。」（長澤氏「「三言」「二拍」について（一）」）

(9) 嚴密にいえば、卷二十四は本文と繪圖不對應になっているが、卷數表示は、版心に多少問題があるものの、他の篇目ほど不自然なものではない。あるいは、卷八・卷九の卷頭・版心表示同樣、埋木で完全に彫りかえたのかもしれない。卷二十四は後述する注18の問題にも關わり、ここではしばらく除外しておく。

(10) 辛島驍氏「警世通言三種」（『斯文』第九編第一號、昭和二年一月）參照。

(11) 「なほ削本通言には、二刻增補本の二刻增補の二字を除きたる如き封面と、同板後印と覺しき敍と首にあり。」（長澤氏「「三言」書名板本續考」）

(12) 長澤氏は「「三言」書名板本續考」で『警世通言』二十四卷本の版木について「右表にて明なる如く、二十四卷本は二刻增補本に出づ。…但に、右表によりて推測するのみならず、數葉を二刻本の寫眞にて比較するに、削本は二刻本の後印にして、殊に、圖像は兩者全く同板後印に係り、…」と指摘し、二刻增補本の版木については「「三言」「二拍」について（一）」で「本書の口繪は馬隅卿氏の給ひし四十片の寫眞により、兼善堂本警世通言及び古今小說の口繪と比較するに全く同板の後印らしく見え、本文亦松崎鶴雄氏の送られし影片數葉について案ずるに同樣なるが如し、殊に古今小說については疑なし。」とする。

(13) 長澤氏「「三言」書名板本續考」および孫楷第氏「三言二拍源流考」（『滄州集』上册、中華書局、一九六五、十二）に、「三言」各版本が所收する篇目の一覽表が記されている。二刻增補『警世通言』四十卷本

の篇目配列はそれにしたがった。

(14) 注12参照。

(15) 長澤氏は「「三言」書名板本續考」で、『喩世明言』二十四巻本の中に繪圖が對應しない篇目が九篇あるのと同じように、『警世通言』二十四巻本の中に三篇繪圖が對應しないものがあることを指摘する。

(16) 『警世通言』二十四巻本の原本は蟲入りにともなう損壞が激しく、過去に補修もなされ、補筆も非常に多い。補筆は版心表示にも多くあり、確かな判斷は難しいが、資料1のほか巻二十巻末、巻二十三巻頭の巻數表示は彫りかえの形跡と見なせるのではないか。

(17) 表7　衍慶堂の二十四巻本シリーズ版木・版本の性格

一、兩書の版木の性格

『喩世明言』二十四巻本	天許齋本『古今小說』	篇目21　繪圖20　同板	
	兼善堂本『警世通言』	篇目1　繪圖2　同板	
		○墨丁の修復あり	
		○文字異同あり	
	『醒世恒言』（現段階では系統不詳）	篇目2　繪圖2	
		葉敬池本と異板	
		清初の衍慶堂本と異板	
『警世通言』二十四巻本	天許齋本『古今小說』	篇目1、繪圖1　同板	
	兼善堂本『警世通言』	篇目23、繪圖23、同板	
		○墨丁の修復あり	
		○文字異同あり	

二、兩書の版本の性格

『喩世明言』二十四巻本	繪圖の不對應	9篇	
	不自然な巻數表示	繪圖の不對應と同じ篇目	
	封面	「重刻增補古今小說」「喩世明言」衍慶堂の識語	
『警世明言』二十四巻本	繪圖の不對應	3篇	
	不自然な巻數表示	繪圖の不對應と同じ篇目	
	封面	「警世通言」、四十巻本の「二刻增補」を削除衍慶堂の識語。	

(18) 二十四巻本の繪圖から、四十巻本の巻十四、巻二十四には「月明和尚」と「白娘子」が收錄されたと考えられる。その結果、二十四巻本の巻十四、巻二十四だった「楊謙之」「楊八老」は、どちらにも四十巻本の巻三十四に收錄された可能性が生じる。巻數表示から判斷をすれば「楊謙之」が收錄されたように思われるが、表示された字體から見ると「楊八老」であった可能性も否定できない。これは現段階では判然としない。

(19) ここで問題になるのは、馬廉氏舊藏の殘本である。

表8

版本	巻四	巻五	巻六
馬廉氏殘本	蔣興哥	范巨卿	新橋市
筆者復元案	蔣興哥	?	新橋市
二十四巻本	蔣興哥	白玉娘	新橋市

二十四卷本卷五には本文繪圖ともに「白玉娘忍苦成夫」が收錄されているが、筆者の復元案では不明とした。それに對し、馬廉氏殘本は卷五に「范巨卿雞黍死生交」を收め、その前後の卷四、卷六は二十四卷本に一致する。おそらく、この狀況から長澤氏は「馬氏零本明言はあるいは原刻本明言の殘存後印本か。」と指摘されたのだろう。原刻本でなくとも、四十卷本の原形を傳えるものである可能性も考えられよう。ただ、大塚秀高氏は『增補中國通俗小說書目』（汲古書院、一九八七、五）で、「卷5の卷頭・柱から判斷し、本來卷15、25ないし35だったものか」として、その版木に前歷がある可能性を指摘する。筆者は原本を未見のため、無駄な憶測を避け、問題提起として記しておく。

(20) 大木康氏「明末江南における出版文化の研究」（『廣島大學文學部紀要』第五十號特輯一、一九九一、二）參照。

(21) 例えば、版木を彫った刻工の問題がある。衍慶堂は天許齋から『古今小說』の版木を、兼善堂から『警世通言』の版木を得て『喩世明言』四十卷本を印行する。天許齋は蘇州の書坊と想定され、兼善堂は金陵（南京）の書坊であり、この二種類の版木は劉素明という刻工が刻したものである。一人の人物が異なる地域の二つの書坊のために彫った二種類の版木が、衍慶堂という一つの書坊に歸すという興味深い經緯がある。現段階ではこれが何を意味するのか不明であるが、衍慶堂の活動の一端を示すものなのかもしれない。

【附記】　本稿は、一九九八年中國古典小說研究會夏合宿における口頭發表（「三言」版本の問題點）の一部をまとめ、加筆訂正したものである。以來、脫稿に到るまで多くの先生方にさまざまな角度からご指導いただいた。大塚秀高氏には資料の貸與や筆者の意見に對する檢討（同研究會の一九九九年夏合宿の口頭發表「衍慶堂について」）など、一方ならぬご指導ご敎示をいただいた。記して謝意を表したい。